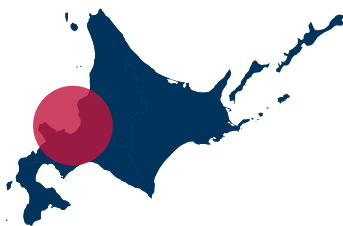


石狩 / 後志エリア



AINU

ISHIKARI / SHIRIBESHI

豊かな自然の恵みを大切にするという精神

アイヌ暮らし

今日では、アイヌ民族も和人(日本の民族的多数派)もグローバル化した暮らしをしています。かつては環境をうまく利用することで物資の調達や移動をしていました。そのため、川や海沿いの場所を選んで村が作られ、狩りや猟、植物などの採集や農耕が営まれました。日々の糧を与える自然環境を大切にするため、採りつくすことや独占を成める物語も伝えられてきました。採れたものはその日の食卓にあがるだけではなく、長い冬の間や飢饉などに備えるための保存食、交易用の商品ともなりました。



④(アイヌ和)
《北海道博物館》

「北海道120万年物語」「アイヌ文化の世界」など5つのテーマに沿って北海道の自然環境、歴史、文化をひも解く博物館。本物の化石や歴史的文化財など、幅広い年代が楽しめる総合展示のほか、ユニークな企画展やイベントなども行われています。

休館 9:30-17:00(10-4月は16:30まで)
定休 月曜(祝日の場合は翌平日)、年末年始ほか

URL www.hn.pref.hokkaido.lg.jp

石狩・後志ゆかりの先人たち



琴似 又市

札幌市のアイヌ民族博物館
生没年 1840年代～1900年代
没後地 北海道札幌市

詳しくはこちら



札幌市立博物館の企画による「クワシイ(漢:札幌通商日明)の先人ら、少無頼に石狩川下流に住み暮らす先人の「あしひき(古の海狗の油を採る器)」などさまざまな、日本語の読み書きなどを身につけた。明治前期は現在の札幌の中心街に住み、開港前から海狗のクワシイ(漢:海狗の油を採る器)のアイヌのクワシイに似ています。後に石狩川下流に引っ越す場所に転居しています。また研究者も札幌のアイヌ文化を語り継いだ人でもおりました。



パチエラ 八重子

和名として、4人の子供を産んで
生没年 1884年～1962年
没後地 北海道伊達市(現 北海道伊達市)

詳しくはこちら



母親(伊達市)のアイヌ・内務省官吏夫妻の二女。子養育は、父と継父のあった子(アイヌ)と養育師(シンパチエラ)から受け、札幌に出てパチエラ一家のもとで育ち、その養女となりました。1906(明治41)年には養父とともに渡米、伝道師として伝道を受け、帰国後は札幌や札幌などで伝道に従事します。またその帰国時(現)にシラカネ(アイヌ)の文化に惹かれ、アイヌ文化が中心となって札幌で発行される雑誌「クワシイ(アイヌ)の文化」に多くの文章を寄稿。1931(昭和6)年には短故事「新クワシイ」が出版されています。



遼星 北斗

1900(明治33)年、金沢市に生まれるアイヌ民族の和名
生没年 1902年～1929年
没後地 北海道札幌市

詳しくはこちら



1920(明治51)年、北海道札幌生まれ。生名(漢語)は北斗。札幌市内の小学校を卒業後、北海道内で教員を務め、札幌に上京し、アイヌ研究などで知られる金田一京助と交流を深めますが、自ら進んで、金田氏内の遼星(漢)や古来の漢字(漢)を行い、漢語の行商人として再び札幌に帰ります。この間、東京での活動を経て北海道のアイヌ文化をつつと、多くの漢字のこし(漢)としての評価を認められたが、最終に1929(昭和4)年に27歳という若さで亡くなりました。

フラを踊るように
アイヌ古式舞踊を
みんなが楽しむ
世の中にした

(株)プライム アイヌモシリ三光
新千歳空港店 店長

札幌ウポポ保存会事務局長

藤岡 千代美さん



札幌ウポポ保存会にいるからできることがあります。

親からは、自分がアイヌだとは知らされていませんでした。25歳くらいの時に本耶阿は習いましたが、ただやってみたくてだけで、サッポロビカコタンへの就職を母に勧められた時に、なんとなく自分はアイヌなのかなと思うようになりました。そこで働く以上、アイヌ文化を知ることは必須です。まずはビカコタンにたくさんあった本でアイヌ文化を勉強し、わからないことは仲間に尋ねながら工芸品も作り始めました。

その1年後に「札幌ウポポ保存会」に入って、はじめて民族衣装を身にまきました。血が騒ぐというか、なんとも言えない感情が生まれたことをよく覚えています。それから17年ほど活動していますが、保存会にすることで文化の伝承ができることをつくづく感じます。いい例がアイヌの儀式です。カムイに捧げる歌や踊り、儀式で着る衣装、必要な料理や供物まで、すべて経験することができます。これは保存会にいるからできることです。

私は手仕事が好きなので、工芸品はすぐに作れるようになりましたが、それだけではアイヌとは言えません。同じように、歌が歌えること、踊りが踊れることがすなわちアイヌではありません。大切なのは、アイヌとしてしっかりとした志を持つことです。最近になって、アイヌの精神性や文化をきちんと理解して、それを基礎として活動をしている人を育てていきたいとも思うようになりました。今後は、そんな若い人たちのために尽力したいと考えています。



新千歳空港ステンドグラスのアイヌ文様をデザイン。

その後、現在の会社に転職しました。週に3〜4日ほど新千歳空港の店舗に出て、あとは会社でデザインの仕事をしています。その一環として、新千歳空港国際線ターミナル3階 保安検査場壁面ステンドグラス「アイヌモシリ神々の住む大地」のアイヌ文様を監修しました。北海道の窓口となる空港の、しかも国際線に飾られるということで、アイヌ文様や着物のステンドグラスという案もありましたが、最終的に動物にアイヌ文様を入れることを決めました。

カムイである動物にアイヌ文様を入れることについては、アイヌの中でも絶対に賛否が分かれると思います。でも、伝統に固執しては新しいものは生まれません。そもそもステンドグラスはアイヌ文化には存在しないものですし、北海道の大自然とそこに生きる動物たちにアイヌの伝統的な文様を組み合わせて表現することで、より多くの人々がアイヌ文化に興味を持つきっかけになってくれればいいと考えました。

アイヌ文様に関してはオリジナルの文様を考えて、デザインを担当するステンドグラスの会社に、それを崩さないように描いてもらいました。アイヌ文様についてはトラブルもありますが、アイヌである私が関わることで、守らなければならない最低限の決まりごとをクリアすることができます。出来上がった作品のクオリティにはとても満足しています。新型コロナウイルスが落ち着いた後には、きっと多くの外国人観光客にアピールできることでしょう。





アイヌの工芸品が、北海道のお土産の新たな定番に。

ほかに大きな仕事としては、新ひだか町の真歌公園に建立された新しいシャクシャイン像の衣装や装身具の監修も担当しました。「平和と共生を祈る」というコンセプトに基づいて、新ひだかアイヌ協会と何度も打ち合わせを重ね、凛々しい威厳の中にも優しさを表現するデザインとなりました。まだ訴えなければならぬこともあります。以前の像が作られた時代とは社会背景も変わりましたから、戦いではなく話し合いでの解決を呼びかけ、あらゆる民族と共存共栄する平和な未来と、思みの大地に感謝の意を込めた立ち姿のオンカミ(拝礼)の姿となりました。

これまで差別や偏見に苦しんできたアイヌがいる一方で、今の若い世代にとっては、アイヌは格好いいものというイメージもあるようです。新千歳空港の店舗でも、オープン当初は本場にマニアックなお客さまが立ち寄るくらいだったが、アイヌ文化に関心を持つ若い層が増えました。きっかけはやっぱり「ゴールデンカムイ」ではないでしょうか。アイヌの工芸品はプレゼントとしても喜ばれるそうで、北海道のお土産の新たな定番になっています。

アルバイトを雇うときによく言うのが、「あなたの対応が、そのままアイヌの人たちのイメージになります」ということ。いち土産物店ですが、アイヌ文化の一環を担っているというプライドが大事なんです。お客様に尋ねられて「わかりません」ということのないように、スタッフにはアイヌ文化の知識もできるだけ教えています。応募してくるの、はともとも興味を持っている人たちなので、積極的に勉強してくれてとても助かっています。

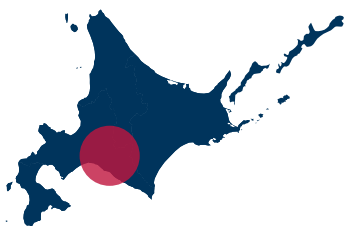
アイヌがアイヌの仕事で食べていける社会をめざして。

アイヌ文化の伝承については危機感を持っています。昔のことを知っている私の母の世代がすでに70代ですから、早くしないと途絶えてしまうのではないかと。なんとかしたいと思うものの、それぞれ普段の生活もあるので、アイヌ文化のことばかり考えているわけにもいかないのが難しいところです。口伝えだけでは限界がありますから、マニュアルを作るのも一つの手ではないかと思っています。本当にそういう状況になってきているんです。

札幌ウホボ保存会も継続させて、次の世代につないでいくのが私たちの役目です。子どもたちにも、強制するのではなく、ただその場にいけるだけでいいと言っています。保存会の集まりに来て何ももしないでいるような子でも、家に帰ってから歌を口ずさんだり踊ったりしているようです。それで十分だと思うので、その環境だけは守らなくてはなりません。それと同時に、子どもたちが希望を持てるような社会にしていけることも大人のアイヌの課題です。

個人的には自分の作品の個展を開くのが夢ですが、大きな目標としてはアイヌの雇用が広がるような活動をしていきたいですね。アイヌがアイヌの仕事で食べていけるような社会になるのが理想です。たくさんの方が、ハワイアンキルトをやるようにアイヌの刺繍を趣味にしたり、フラを習うのと同じ感覚でアイヌ古式舞踊を習ったり。アイヌ文化は世界的にも素晴らしい文化なので、それくらい「あたりまえ」で「おしゃれ」な存在になれるはずだと思います。

平取エリア



AINU

BIRATORI

木彫りや刺繍に見るアイヌ文化の美
アイヌ—手仕事

アイヌ民族の衣服や持ち物には、
独特のアイヌ文様が施されています。
渦巻や波型などのベースとなる形状があり、
それらを組み合わせて複雑なデザインが作られています。
食器やマキリ(小刀)などの木彫は
オッカイカラベ(男のつくるもの)と呼ばれ、
刺繍や編み物などはメノコカラベ(女のつくるもの)と呼ばれます。
江戸時代には和人にもその存在が知られ、
交易品として本州にもたらされました。



📍(アイヌ)
〈平取町立二風谷アイヌ文化博物館〉

アイヌ文化を正しく受け継ぎ、未来へと伝えていくことがコンセプト。民具や工芸品など、人間と神と自然が一体となったアイヌの暮らしと文化を伝える展示資料のほか、アイヌに伝わるユカラ(英雄叙事詩)の映像など視聴覚資料も充実しています。

🕒 9:00~16:30
📅 開催 月曜(11月16日)~12月15日、1月16日~4月15日)、
12月16日~1月15日は休館
🌐 www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/

平取ゆかりの先人たち



📍 平取町 住人
貝澤 正
アイヌの歴史研究家と社会教育者として活躍
生誕年: 1912年~1992年
出身地: 北海道平取町

農業に従事する傍ら、若くして当時のアイヌ協会などの活動に参加、種別誌「蝦夷の光」にも投稿しています。1941(昭和16)年に10年担任員として熊鷹二風谷、現地民協会の主任としてアイヌ文化を普及させるための事業に尽力。地域の発展も図る。町会議員や二風谷アイヌ文化資料館特別役員などに就任。北海道大学協会の副理事長として文化拡大・情報開化に貢献。世界の歴史文化の交流事業などにも参加した。晩年、二風谷少人協会の理事・土庫の協賛機関に就任し、建設費の復興支援などに尽力。自身の歴史学博士と北海道の歴史研究に、傾けられた。



📍 平取町 住人
賀野 茂
アイヌ資料館の館長
生誕年: 1928年~2008年
出身地: 北海道平取町

幼少期にアイヌ語を習得する傍ら、青年期は美術家や測量士などに従事していたが、伝統的な生活文化が急速に消滅する中で、研究家や収集家の活動を通じて、収集品を収集し保存することになり、収集品を研究、アイヌ語の習得を始めた。1972(昭和47)年に二風谷アイヌ資料館を設立。「アイヌの魂」(コシヘリ)編纂、「夏野茂のアイヌ語集」などの著作を発表している。1983(昭和58)年に10年担任員として「二風谷アイヌ資料館」を開館するまで、アイヌ文化の伝承に尽力された。1994(平成6)年に参加協議会となり、アイヌ文化復興会の設立などに力を尽くした。



📍 平取町 住人
川上 勇治
土佐青年会館の館長
生誕年: 1928年~2004年
出身地: 北海道平取町

1930(昭和5)年、平取町ヘナダに生まれました。1963(昭和38)年に川上啓作を師として札幌市立南支庁、その後札幌市のパンソライ隊に入隊した。隊員時代に、平取町に帰郷し、12歳のアイヌを助けた。アイヌの資料としてまとめられ、今日に達しています。地元歴史家と結んだ「歴史とアイヌ」でも協賛の中心を担いました。また、北海道アイヌ協会の理事や平取町二風谷アイヌ情報館の運営委員長など、アイヌ民族の発展発展に尽力した。遺著を2013年に刊行。



📍 平取町 住人
平村 ベンリウク
平取町の29人の子供たち
生誕年: 1933年~1993年
出身地: 北海道平取町

江戸時代の戦か川邊から開始にかけての平取のコンラの開拓者(コンコロ)の一人とされています。早稲田時代に平取や北海道の調査にも、外国人の旅行、研究家の活動にも参加し、収集品を収集し保存することになり、収集品を研究、アイヌ語の習得を始めた。1972(昭和47)年に二風谷アイヌ資料館を設立。「アイヌの魂」(コシヘリ)編纂、「夏野茂のアイヌ語集」などの著作を発表している。1983(昭和58)年に10年担任員として「二風谷アイヌ資料館」を開館するまで、アイヌ文化の伝承に尽力された。1994(平成6)年に参加協議会となり、アイヌ文化復興会の設立などに力を尽くした。

アイヌ文化と 現代アートの 融合の先に。

北の工房 つとむ
店主

貝澤 徹さん



土産物の木彫りから写実木彫、そしてアイヌ文様へ。

白老の高校を卒業して、父の後を継いで木彫をやらうと思って平取に戻りました。最初は店先で観光土産を制作していました。お客さんの「こんなのが欲しい」というリクエストに応えながら、好きなものを彫るのは楽しかったですね。三人兄弟の長男で、手先は弟たちの方がずっと器用でしたが、地道にコツコツとやっていました。

最初の転機となったのは、北海道を代表する木彫家の藤戸竹喜さんに出会ったことでした。祖母のもとを訪れた藤戸さんに、小さな熊の写実彫刻をいただいたのですが、観光土産の熊の木彫とは全然違って衝撃を受けました。こんな木彫もあるんだと思い、写実的な動物を彫り始めたのが20歳頃のことです。

それから30代半ばまでは動物などを彫っていましたが、曾祖父の貝澤ウトロントクのイタ(お盆)を複製したことがきっかけでアイヌ文様を彫り始めました。二風谷アイヌ文化博物館がオープンした際のシンポジウムで、家に残っていた曾祖父のイタを出品したときに、先輩がそのイタを真剣に見ている表情を見て、自分もアイヌ文様を彫らなくちゃいけない、そう思ったんです。



単なるアートではなく、アイヌの伝統的技法を。

その後、アイヌの伝統文化と現代アートを融合させた作品を作り始めました。「アイデンティティ」は、今のアイヌ民族を表現した作品です。上着のファスナーの隙間からアイヌ文様が見えています。ファスナーが途中なのは、外見はみんなと同じでも、内面にはアイヌの精神を秘めているという表現です。現代のアイヌがどう生きるかを問うメッセージ性が評価され、シリーズで製作しました。私の作品には必ずアイヌの伝統的技法を取り入れています。単なるアートでは意味がありませんから。

代表作のひとつ「UKOUKU(ウコク)/輪唱」を製作するきっかけとなったのは、昔のアイヌ民族の入れ墨をしたお婆さん。アイヌ文化を継承する中で、途絶えてしまった入れ墨の風習を立体物で残したいと思いました。

女性たちが「ウボボ」という座り歌を歌うシーンに、老婆から少女まで世代の異なる5つの手を入れて、世代交代しながら文化が受け継がれていくという思いをこめて創り上げたものです。

札幌市営地下鉄南北線さっぽろ駅コンコースにある、アイヌ文化を発信する空間「ミナバ」のシンボルオブジェ「IWOR-UN-PASE-KAMUY(イウォルン パセ カムイ)」もまさに労作でした。素材は、砂流川下流の水田から出土した樹齢300年ほどの埋もれ木で、同じ材料は二つとない上に、彫っていくうちに木が割れたりして、インスピレーションが湧いたそのままの勢いで作っているので、どんな作品でも同じものは製作できません。



平取エリア BIRATORI



人生の節目に、恩人たちとの出会いがあった。

おかげさまで、店にはいろんな方が訪ねてきてくれます。最近特に多いのは、「ゴールデンカムイ」のファンの方々です。アイヌ文化の専門書を読む人は限られますが、マンガやアニメはものすごい数の人の目に触れるし、海外にも広がっています。この作品の影響力の大きさには本当に驚かされました。アイヌの料理や狩猟などの風習や文化がリアルに表現されていて、とても勉強して描いていると感心することしきりです。

2016年に作者の野田サトル先生が来店して、資料用のマキリ(小刀)を注文されました。私が作ったマキリは、キロランケという登場人物のマキリとして使われました。そのとき、野田先生がツイッターで私のことを紹介してくれたおかげで、マキリの注文が急増したんです。

主人公のマキリが欲しいとか、自由にデザインしてほしいとか。若い女性も興味を持ってきて、自分でメノマキリを注文していきますね。本来は、男性からプロポーズされるときに贈られるものなのですが(笑)。

今思い返してみると、結局は人に恵まれてここまで来たのだと実感します。人生の節目にいい出会いがありました。藤戸竹喜さんにはじまって、曾祖父のイタの真価に気づかせてくれた二風谷アイヌ文化博物館学芸員の吉原 秀喜さん、そして私の作品を高く評価してくださった専門家の方々、もちろん野田先生も。イギリスなどの海外で、先住民族の文化に対する理解がある人々に出会ったことも活動の場を広げるきっかけになりました。

各自の得意分野で、アイヌ文化を高めていければ。

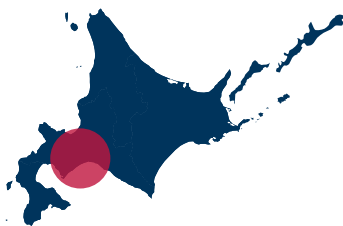
2013年3月、平取町のアイヌ民芸品「二風谷イタ」と「二風谷アトツシ」が北海道で初めて伝統的工芸品の指定を受けました。経済産業省の基準では100年以上の歴史を持つ技術・技法であることが求められますが、アイヌの工芸品は製作者が不明なものが多く、なかなか指定されませんでした。しかし、曾祖父の貝澤ウレントクが100年以上前に製作していたことが証明できて、伝統的工芸品に指定されました。

明治時代に名工と称された曾祖父には及びませんが、ありがたいことに世界各地で作品が展示されるようになりました。それに刺激されて、私と同じような作品を手掛ける若手が出てきてくれないかと願っているところです。二風谷はイタが主流なので、もともと立体彫をする人が少ないんです。アイヌ文化と現代アートを融合させた本取には、まだまだ可能性があると思いますから。

ウボボイのオープンで、アイヌ文化についての認知度が高まるのは非常にいいことだと思います。でも、すべてがそこに集約されるのではなく、地域性も大事にしていきたいものです。同じアイヌでも、地域によって言葉も違えば風習も違う。たとえば、平取のアイヌは手仕事で得意です。その違いを活かしながらうまく連携が取れば、新たな展開も見えてくるのではないのでしょうか。

ユカラが得意なアイヌ、刺繍が得意なアイヌ、木彫りが得意なアイヌ、それぞれが得意分野を極めて、アイヌ文化を高めていけたらと思います。その中で、私は職人として、木彫りをもっと極めていきたいですね。少しでもいいものを、後世に残るものを作ることができれば本望です。

登別 / 白老エリア



AINU

NOBORIBETSU / SHIRAOI

伝統芸能から アイヌ文化の 豊かさと魅力を 知ってほしい

公益財団法人アイヌ民族文化財団
文化振興部 伝統芸能課 舞踊グループリーダー

山道 ヒビキさん



アイヌとシサムが共に力を合わせて伝統芸能に取り組む。

ウボボイでは、舞踊グループリーダーという、26人のメンバーをまとめる役割を務めています。私は平取町出身で、幼い頃からアイヌの歌と踊りをしてきましたが、まだまだ経験やスキルが足りないと考えています。それを教えなければならぬということで、プレッシャーを感じることもありますが、各地の伝承者に話を聞いたり文献をあたりたりして、根拠を示しながらメンバーに伝えるようにしています。

舞踊グループのメンバーは、半数がアイヌで半数はシサム(和人)です。お互いの文化を大切にしながら、アイヌ文化の継承・発展に取り組んでいます。歌と踊りといったアイヌの芸能は、地域によって節回しや手、足の運びが異なるため、歌い分けや踊り分けに苦労しました。そのほかにも私は、伝統芸能上演プログラムのステージ構成を組み立てるという業務がありました。これまでに、日本語の解説を加える「シノッ アイヌの歌・踊り・語り」と、イヨマンテという儀礼を題材にした「イノミ アイヌの祈り・歌・踊り」というプログラムを準備しました。

扱っている演目は合わせて17演目あり、そのうち7演目は阿寒、帯広、むかわ、本別の伝承者に指導していただいたものです。そのほか10演目は、これまで白老や各地域で伝承されてきたものをベースに、残されている貴重な音声・映像資料を照らし合わせて、できるだけ忠実に復元しました。歌や踊りは、昔のままに受け継いでいくことが難しく、少しずつほかの文化の影響を受けてしまいます。それを、暮らしの中で受け継いでいた時代に立ち返ってみようという試みです。



それぞれの地域を紹介するのがウボボイの役割。

アイヌの芸能は日々の暮らしや儀礼の中で受け継がれていくもので、それを現代に伝えたい、残したいという思いを強く持っています。「イノミ アイヌの祈り・歌・踊り」では、熊の霊送りである儀礼「イヨマンテ」の宴宴の一部を再現したいと考えました。イヨマンテでは、カムイ(神)をもてなすために歌と踊りが繰り返されます。過去のイヨマンテを実際に見たことがない世代の私たちにはイメージを持つことが難しく、数多くの模索をしました。

一方「シノッ アイヌの歌・踊り・語り」は、日本語で解説してから踊りを披露するというスタイルです。各地の特徴を活かすことにこだわっているため、演目に合わせてその地域の着物に着替えます。各地の伝承者に手取り足取り教えていただいたものを、できるだけ忠実に再現するように心がけており、教えていただいた8名のお名前は、パンフレットにも記載させていただいています。中には「伝えられてよかった」と涙を流される方もいて、うちのメンバーも一緒に泣きました。そんな心の交流も財産になると思います。

メンバーの中で歌と踊りの経験者は10名ほどで、あとは初心者でした。歌や踊りは簡単なものではありませんし、見た目以上にハードです。ステージを成立させることだけを考えたら、どこかの地域の演目に絞ったり、各地域の特徴をミックスさせたりなど、オリジナルの演目を作る方が簡単です。しかし、ウボボイには、それぞれの地域について紹介する役割があります。私たちのステージで各地域の紹介をしていますので、次はぜひ、その地域に行っていたらいいと思います。





新しい言葉をつくることで、生きた文化に。

アイヌの芸能のほかに、アイヌ語や木彫りなど、アイヌ文化に関してはこれまでに一通り経験してきました。興味を持っていた、ステージプログラムの企画構成も担当できました。また、公園職員と博物館の研究員・学芸員、アイヌ語の研究者で構成される「国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ語表現・新語検討ワーキング会議」の委員として、ウポロイの施設にある看板や案内・サインなどのアイヌ語を考えるという経験もさせていただいています。

ワーキング会議では、既存のアイヌ語にない新しい言葉を作るべきか否か、という議論から始めました。各国の先住民族マオリやネイティブハワイアンなども、新しい言葉をつくることで、自分たちの言葉で会話をしている。その姿を見たときに生きた文化だと感じました。アイヌも同じように新たなアイヌ語の取り組みとして新語を作りたいと考えています。新語といっても、アイヌ語としてのベースはしっかりとあります。たとえば「体験交流ホール」なら、「体験交流＝人が多く集まる＝ウエカリ」「ホール＝家＝チセ」というように、既存のアイヌ語を拡大解釈して使っています。

ウポロイでは、アイヌ語を第一言語として位置付けており、使わないと上達しないので、簡単なアイヌ語を皆で使うようにしています。また、昔がボレンというアイヌ語のニックネームを持っているので、いつもボレンと呼びあっています。「イヌミ アイヌの折り・歌・踊り」でもメンバー同士のやりとりはアイヌ語です。シフト勤務で毎日メンバーが変わり、アイヌ語セリフもアドリブなので、演目の導入には各地域の方言が飛び交います。そのあたりにも注目していたけれど、ステージをより楽しんでいたのではないかと思います。

さまざまな文化が尊重し合う世界に。

アイヌ文化を扱う仕事ができるのはとても恵まれていて、それが当たり前だと思てはいけないということ。アイヌ文化の中でも芸能は広く知られているため、はじめにお客さまや各種の取材の多くが私たちのグループにきます。もちろんメンバーは全力で頑張っていますが、ほかの分野の人も同じように頑張っています。せっかくウポロイに来たのに、伝統芸能上演プログラムを観ただけで帰ってしまうお客さまもいると聞き、少しだけ残念な気持ちがあります。

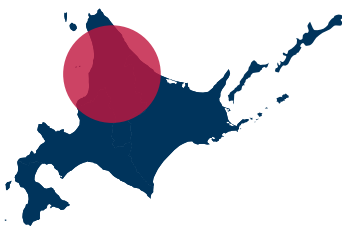
私は幼いころからアイヌの歌と踊りをスバルダで教えられ、毎晩1時間はストレッチ、1時間は歌と踊りの練習をして、土日は各地に踊りに行くという生活を続けてきました。それが嫌になり、アイヌ文化から離れた時期もありました。そんな時に札幌で開催された「先住民族サミットinアイヌモシリ 2008」で、自分と同年代の人たちが新しい表現方法でパフォーマンスをしている姿に衝撃を受けて、アイヌ文化の魅力に気づきました。

私たちは決して、アイヌ文化のことがだけを知って欲しいと考えている訳ではありません。アイヌ文化は世界の文化のひとつに過ぎないと考えています。ウポロイを通して、世界にはさまざまな文化があり、それを尊重し合うことが大事だということを伝えていけたらいいですね。同じクラスにアイヌや外国人など、自分たちとは異なるルーツを持つ人がいても当たり前です。将来、子どもが生まれたら、アイヌであるということを理解しつつ、ほかの文化もナチュラルに受け入れることができる感覚を持ってほしいと願っています。

6月13日に行われた
オリンピック聖火リレー
「セレブレーション
(点火セレモニー)」に
代表ランナーとして参加



旭川 / 宗谷エリア



AINU

ASAHIKAWA / SOUYA

この世のすべてはカムイによってもたらされた

アイヌ—信仰

アイヌの信仰では、この世の万物に魂が宿っていると考え、動物など自然の恵みを与えてくれるもの、火や水など暮らしに欠かせないものなどをみな「カムイ」として敬いました。災いをもたらす病気や飢饉なども、カムイとして祀り、立ち去ってくれるように祈りました。人間の世界での役目を果たしたカムイは、やがてカムイの世界へ帰ることになります。大切に育てた子熊を、たくさんの土産を持たせてカムイの世界へ送り返す「イヨマンテ」は、特に重要な儀式とされ、近隣のコタンから大勢の人を招いて盛大に行われました。



アイヌ
 (川村カイトアイヌ記念館)

アイヌ民族の文化の正しい伝承を目的に、1916年に開館した日本最古のアイヌ資料館。アイヌの文化や習俗を伝える生活用具など貴重な資料が数多く展示されているほか、アイヌ文化を体験できる講演プログラムも人気です。

時間 9:30—17:00 (7—8月は18:00まで)
 休館 年中無休
 URL kayura-mhp.jp/index.html

旭川・宗谷ゆかりの先人たち



川村 カイト

新島襄が初めて編纂した『アイヌ文化の源流』の著者にも関与

生誕年 1829年—1917年

出身地 青森県つがる市(現 北海道つがる市)

詳しくはこちら



明治期の北海道が急変する環境下で、自然に慣れ、開拓の先陣を任された。北海道開拓や、開拓を補助した本所の長野泰一、天来、樺太、朝鮮半島などで開墾の仕事を成功させた。後に父職のイタリシロマが1916年に開館した「アイヌ博物館」を創設。開館の仕事を助けた。彼を招いて「川村カイトアイヌ記念館」として開館された。アイヌ文化の普及、啓蒙に努めて、旭川市の発展にも貢献した。



柏木 ベン

宗谷地方におけるアイヌ文化の継承者

生誕年 1878年—1963年

出身地 宗谷郡利根町(現 北海道利根町)

詳しくはこちら



柏木ベンは、現在の界内市、宗谷村合併前に生まれ、10歳のころ宗谷村第二集会所に移り住んだ。1942年2月に母がなくなり、1943年まで孤児院で生活した。ベンは宗谷地方のアイヌ語の話し手であり伝承にも詳しい。研究家の調査にも関与して多くの宗谷アイヌの習俗や文化を語り継いだ。宗谷アイヌの歴史や文化に関する書籍、展覧会などにベンの名前が記されて、これらは貴重な伝承となっています。

旭川ならではの アイヌ文化の 伝承や発信を 担っています

川村カト子アイヌ記念館 副館長

ピリカウレシカの会 代表

川村 久恵さん

アイヌの伝承活動や伝統行事の支援も大事な仕事です。

川村カト子という個人が作った私設の記念館ですが、旭川のアイヌ文化を支えているという自負があります。昔のことを熟知した年長者が亡くなっていく中で儀式を執り行いあたり、一家の働き手である男性が中心となって準備を進めるということが難しくなっています。ここ20年くらいは、道具類を含めた準備をほとんど当館で引き受けています。それを次世代に伝えていくというのが大きな課題です。誰かがやらないと、地域の伝承が途絶えてしまいますから。

公的な援助がないので運営も厳しいのですが、逆に私設だからこそ続けられたという面もあります。今も、公民館に希望者を集めてそばでもらったサケを、一週間くらいかけて敷地内のチセで燻して「鮭ババ」を作っています。このように、公的な施設では難しいことが自由にできるのは私設ならではの、記念館の展示内容に関しても、アイヌの目線ですべてを決めていくことが可能なので、今後はより地域に根差したものに変わってほしいと考えています。

以前は、この辺りで木彫り熊の生産に携わる人が多く、「熊彫り通り」と呼ばれたほどでした。でも、それがだんだんと減ってしまっ。ものづくりに関わっていた人をはじめ、アイヌとしてのドラマがそれぞれにあるわけですから、わかる範囲で紹介していけたらと思っています。石狩川を必死で遡上するサケと、それを狙うクマとの関係性はドラマチックで、だから上川ではサケをくわえたシグマの木彫りが盛んなのだと思います。記念館として、そんなサケとクマに絞った展示も面白いかもしれません。



動物園ガイドや出前授業でアイヌや環境について解説。

アイヌ関連の名所や施設を結んで周遊を楽しむ「ユウカラ街道」というプロジェクトの一環で、旭山動物園でアイヌ目線の動物ガイドを務めています。旭山動物園にはシマフクロウがいますし、オオカミとエゾシカが並んで展示されているので、天敵のオオカミが絶滅したことでシカが増えすぎたことや、アイヌにとってシカは獲物だがオオカミはカムイであることなど、アイヌと関わり合いのある動物についての説明がしやすいんです。

中でもシマフクロウは、アイヌにとっては「村の守り神」ですし、環境を考える上でも大切な存在です。森の奥深くではなく、冬でも凍らない川や湖の近くで、巨木があるような環境でないと生きていけないのですが、環境の変化で今はそんな場所がなくて、大体160羽くらいと言われているシマフクロウの数を増やす計画が進められているもの、なかなか増えません。自然豊かと言われる北海道にも、実はそういった問題があるということを伝えています。

ほかにも、旭川市教育委員会が主催する出前授業では、年間でも市内の小中学校10校ほどに出向いて「アイヌ民族音楽会」を実施しています。アイヌの伝統楽器「ムックル」や、アイヌの歌と踊りを体験してもらって、児童や生徒の質問に答えるという内容です。今年はコロナの影響でムックル体験はできず、踊りも手を繋ぐようなものは振り付けを変えて、歌もあまり大きな声は出さないように、とにかく気を使いましたが、今後も継続していきたい活動です。





旭川のアイヌ観光をもっと盛り上げていくために。

アイヌの観光地といえば、今はまず白老や阿寒、詳しい人なら二風谷を思い浮かべるでしょうか。半世紀ほど前は旭川もかなり盛んで、街のあちこちで古式舞踊の披露が行われていたそうです。当時は川村カトのネームバリューも非常に大きかったのですが、最近あまり目立たなくなっているように感じます。日本最古の私設アイヌ資料館を作った功績や、北海道の鉄道を支えた測量技師としての業績など、もっと伝えていきたいですね。

そんな中、「カムイと共に生きる上川アイヌ」が日本遺産に選ばれたことはとても大きな出来事です。テレビ番組になったこともあって、道内外のお客様が来てくださいます。上川アイヌは川を大切にしている、奇岩の渓谷に「魔神と英雄神の戦いの伝説」を残しています。近年では、旭川駅近くの忠別川に週上してくるサケを迎える儀式も始めました。日常生活では馴染みがなくなった川から学べることも多いので、旭川でも川と親しむ観光を推進しようとしています。

その一例として、モニターツアーで石狩川の神居古潭付近をラフティングしました。4kmほどのルートで激流の場所もありますが、ラフティングだともろそれが楽しいです。何より景色が違います。川の中からいつもの街を見るとまったくの別世界のような感覚です。ラフティングをしながらアイヌ目線でのガイドもできるかもしれません。昔は丸木舟で通行していた川を、もっと安全に、同じ目線で景色を見ることができるといいですね。何かと実現できないかと大いに期待しています。

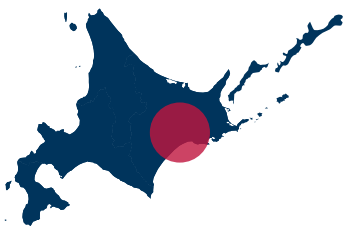
地元のものづくりとのコラボでアイヌ文化を発信。

ウゴボイの開業で全国的にもアイヌ文化への注目が高まっていますが、私もアイヌ文様を使って、旭川の大雷地ビールのラベルと高砂酒造のパッケージをデザインしました。大雷地ビールのラベルは、アイヌ衣装を着た人々と一緒に麦とホップを描いた楽しいもの。一方の高砂酒造の「旭神威」はウゴボイの応援を目的とした企画で、高級酒のイメージを崩さないようなデザインを心がけました。木製のホルダが六角形なので、それに合うような文様を考えました。

旭川は木製家具の大産地ですから、インテリアの中にアイヌのデザインを取り入れてみたいですね。大きなものは難しくても、たとえばアイヌ文様が浮かび上がるラップシェードなどは実現できそうですね。旭川は札幌に次いで人口が多いまちで、ものづくりも盛んです。アイヌの美しいデザインを活かして、そんな旭川ならではの活動をしていければ、ほかにも、日本遺産のプロジェクトで知り合ったファッション関係の方と一緒に何かできないかと模索しているところです。

記念館の展示に関しては、新たに作った刺繍や工芸品を増やす方向で考えています。古いもののほとんどはすでに各地の博物館に取められていて、それいものを手に入れるというのは非常に難しいので、たくさんある木彫彫熊などを活かしながら、川をめぐるサケやクマとアイヌの関わりなど、テーマ的な展示を増やしていければ、川村カトアイヌ記念館としての今後のビジョンは、いろいろな人が出会う場所になることです。訪れた人それぞれが何かを感じ動けるような、来て良かったと思えるような、そんなモヤコトがある場所にしていきたいですね。

阿寒 / 釧路エリア



AINU

AKAN / KUSHIRO

私たちの
ものづくりは
祖母の教えを
大切にしています

cafe & gallery KARIP

下倉 絵美 (姉)さん(左)

民芸喫茶サロン

郷右近 富貴子 (妹)さん(右)



姉妹でアイヌ音楽のユニットとして活動しています。

阿寒湖は観光地なので、夏季シーズンにはアイヌコタンは沢山の観光客でとても賑やかでした。長老たちのアイヌの歌やムックリの音色が休みなく流れている環境で育ったので、自然とアイヌの踊りや歌や楽器に触れる機会も多かったと思います。私たち姉妹も物心つく前から阿寒アイヌ文化保存会の活動に参加していて、コタンに住んでいる子供たちのほとんどは、冬季の閑散期になるとおばさんたちから踊りを習ったりして、楽しく過ごしていました。

【富貴子】

20代前半に、東京のアイヌ料理店「レラ・チセ」というお店で働いていたことがありました。その場所を通して、阿寒湖以外のアイヌの人たちに出会ったり、友人が出来たりして、その仲間たちと歌や踊りを共に学び合う機会がありました。アイヌのウホボ歌も、そのくらいの頃からステージで歌うようになりました。【絵美】

2011年に、音楽ユニットの「kapiw& apappo(カピウ&アパポ)」を結成しました。ユニット名は日本語で「カモメと花」という意味です。カモメが姉、花が私で、自分たちの好きなアイヌ語のニックネームです。二人がそれぞれに教えてもらったことや経験してきたことを、アイヌの伝承歌「ウホボ」や、民族楽器の「ムックリ」「トンコリ」を交えながら歌っています。【富貴子】



ゴザをアレンジしたオリジナルのカゴバッグを製作。

アイヌの木彫家だった叔父・床ヌアリの旧アリエを引き継ぎ、夫と「Cafe&Gallery KARIP」を営んでいます。伝統的なゴザをアレンジしたカゴバッグをはじめ、コースター、プレスレット、小物など、いろいろ取り組んでいます。カゴバッグの材料は、ガマという水辺の植物を使います。湖沼がなくなったり、護岸工事で草が生えなくなるという環境問題も、ものづくりを通して考えるようになりました。毎年継続的に利用するためには、山菜などもそうですが、すべてを採集するのではなく、若い芽は残しておいたり、毎年取る場所を変えるなど、アイヌの生活の中に学ぶことが多いです。一点一点ハンドメイドなので量産はできませんが、アイヌ工芸や北海道の風土を感じさせるものが日常生活にあることで豊かな気持ちになれるような、そんな作品を作っていけたらいいですね。【絵美】

カゴバッグ作りでも、うまいかなかったり、うっかり目を飛ばしたりした時は最初からやり直すしかありません。材料の中には、祖母が何十年も前に植えたオヒョウの樹皮もあります。そんな貴重なものを選んでくれた祖母には感謝しきれませんし、樹皮を見ると祖母が長いスパンで考えながら自然と向き合ってきたことを実感します。それを商品にして売ってしまったら自分の手元になくなってしまふし、良いものを作ってみんなに使ってもらいたい……。なので、素材は無駄にできないし、素敵なものを作るように頑張らなくちゃ。【絵美】



阿寒／釧路エリア AKAN / KUSHIRO



アイヌ料理店のメニューも素材を無駄にしない心で。

私はアイヌコタンでアイヌ料理店を営んでいます。もともと母が始めた店で、「ポッチェイモ」は当時からの人気メニューです。最初のうちは、浦河の祖母が仕込みを手伝いに来てくれていました。その仕込みがものすごく大変で、冬のあいだ外に置いて凍らせて、発酵したジャガイモの皮を剥くのも一苦労だし、独特の臭いもきついし、寒い時期に水を使うし……とにかく重労働なんです。中学生だった私たちも、よく手伝われました。【富貴子】

今は父が仕込みをやっていますが、その大変さがわかっているので、大切に使用してもらっています。ポッチェイモとしてだけでなく、卵にして出したり、そういうアレンジはしていますが、作り方の基本は祖母の姿を見て覚えたものです。料理の仕方はもちろんですが、ものを大切にするという気持ちの方を強く受け継いでいるかもしれません。「ひとつも無駄にできないんだよ」という祖母の言葉は、今でも私たちの耳に残っていますから。【富貴子】

今の阿寒湖を舞台にした映画「アイヌモシリ」に出演。

2020年に全国公開された映画「アイヌモシリ」では、阿寒のアイヌコタンや、北海道に暮らすアイヌ自身がアイヌの役を演じています。いい映画を作るために、それぞれ協力しあって役割を果たしたという感じです。監督さんが、台本のセリフにとらわれず「こういう意図でこういうシーンを撮りたい」と、役者の気持ちを大事にしてコミュニケーションをとりながら、撮影が進められました。【絵美】

映画の中で印象的なシーンはたくさんありますが、ちょっと嬉しかったことのひとつは、阿寒湖中学校の図書館や体育館、校歌の歌詞など、卒業生としてとても懐かしい風景が映像に残されたことですね。来年には小学校と統合になり壊されてしまうので…。今回出演した息子も、映画に出たことでいろいろなことを考えるようになったと言っていたので、成長のきっかけにもなったと思います。【絵美】

映画を含めていろいろな経験をしてきた中で思うのは、表現って何だろうということ。アイヌ文化は料理も歌も踊りもシンプルなので、真似しようと思えばすぐに似たようなことができるんです。でも、私たちの音楽や料理や工芸には、祖母や母、家族と過ごした時間や、コタンの人や出会った人たちと共有した思い、そのすべてが表れているように思います。「それって何?」と聞かれても説明できないのがフレムマですが、その繋がりを大切にしていきたいですね。【富貴子】